

215-314

日本地球化学会ニュース

No. 97
1983. II. 2

杉浦 敏昭 神奈川県立金井高
佐原良太郎
杉山 隆二 東海大海洋
植田 良夫 東北大学理学部
小川 務 愛知県公害調査センター
越智 正 香川大学農学部
岡林 弘之 放医研
安島 忠秀 鳥取県立米子北高
真室 哲雄
出口 泰弘 建設技研・柏計測室
松波 文博
竹下 寿 門司校
紀本電子工業㈱ 賛助会員
大塚 良平 早稲田大学理工学部
杉野 則夫
種子田定勝
渡辺 淳夫
正会員 790 学生 24 賛助 13 名誉 4

「北半球における第四紀氷河作用」国際集会報告
この会議は 1974 年以来毎年開催されているが、発
足当初はヨーロッパの第四紀氷河作用が主でありその
ご大西洋を隔てた北アメリカとの対比の上で北半球を
一単位として論ずるようになった。アジアでの開催は
今回が最初である。
1981 年 7 月 28 日～31 日京大会館において 47 名（国
外 19、国内 28）の研究者を集め開催された。主催は堀
江で本学会は関連学会とともに後援した。本集会は、
堀江を中心に 1971 年琵琶湖において 200 m 堆積物コ
アが採取されその解析がすすんだことと日本高山域
モレーンとの対比が世界にさきがけて行われてきたこ
とから、ヨーロッパ、北アメリカの研究資料を持ちよ
り、さらにグローバルな観点から北半球の氷河作用に
ついての対比、討論を行うことを目的にしたもので
あった。

集会は次のサブテーマで行われた。
(1) アジアにおける氷河作用および低位置堆積物と
山岳モレーンの対比（6 講演）
(2) 琵琶湖および他の遺存湖の堆積物コア試料と
古気候（5 講演）
(3) 古地磁気と気候変動（4 講演）
(4) ヨーロッパ、北アメリカ、アジアの氷河作用に
関する総合討論（7 講演）
会議の主題があまりなじみのないもののためか地球
化学者の参加は少なかったが熱心な討論が行われた。
中でも本場アルプス氷河の研究者（スイス、オースト
リア）が日本アルプスを実際に歩きその成果を発表し

たのが特に印象的であった。また会議のなか日には比
叡山、琵琶湖、古琵琶湖層、京大琵琶湖古環境実験施
設の見学に費された（石渡良志、堀江正治）。

IAGOD Commission on Manganese 日本委員
からのお願い

IAGOD Commission on Manganese および、
IGCP Project No 111 “Genesis of Manganese
Ore Deposits”では manganese deposits の地質
学、地球化学的研究を国際的規模で推進しています。
これに関連して、IAGOD Commission on Man-
ganese 日本委員会では我国における Manganese
Deposits の地質学、地球化学的研究業績を網羅する
よう努力しています。

つきましては 本学会員の中で Manganese Dep-
osits の鉱物、鉱床、地球化学に関する研究論文をお
もちの方は別刷一部を10月末日までに下記へ御送付下
さい。

なお、御送付いただいた別刷は日本からの Prog-
ress Report の資料にいたします。また、研究論文
は雑誌の種類は問いませんが 1981 年度以降のものを
おねがいします。

別刷送付先

〒060 札幌市北区北10条西8丁目
北大、理、地質学鉱物学教室
針 谷 有

IAGOD Commission on Manganese
日本委員会

ニュース記事や御意見をお寄せ下さい

本ニュースは年3回（大体5月、9月、1月）発行
されます。記事は横書き1行24字（用紙は自由）にて
書いていただければ助かります。次回97号は1月10日
〆切1月下旬発行の予定です。

編集者 田中 剛、清水 洋

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298 (54) 3558

発行所 日本地球化学会

〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル（4F）
日本学会事務センター内

電話 東京 03 (815) 1903

振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

1982年度日本地球化学会 総会報告

10月19日（火）15時から16時まで、琉球大学教養部に
おいて会員約70名出席のもとに行われた。総会次第は
下記の通りである。

1. 開会
2. 議長選出
3. 会長挨拶
4. 年会委員長挨拶
5. 1981年度事業および決算報告
6. 1982年度事業および会計中間報告
7. 1983年度事業計画および予算案
8. その他
9. 閉会

1981年度 事業報告

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1980年12月末	818	13	4	835
入会	44	0	0	44
退会	19	0	0	19
1981年12月末	843	13	4	860
2. 年会・委員会等開催数				
年会 1	(¹⁰ / ₁₀ ～ ¹⁰ / ₁₂ , 清水)			
総会 1	(¹⁰ / ₁₁ , 清水)			
例会 2	(² / ₁₄ , ⁶ / ₁₃ , 東京)			
評議員会 4	(² / ₁₄ , ⁶ / ₁₃ , ¹⁰ / ₁₀ , ¹² / ₁₃)			
幹事会 2	(⁴ / ₁₈ , ⁹ / ₂₆)			
財政委員会 1	会誌編集委員会 1			
ニュース委員会 1	行事委員会 1			

3. 会誌発行
G. J. Vol. 14 (5, 6), Vol. 15 (1, 2, 3) 計5号
地球化学 Vol. 14 (2), Vol. 15 (1) 計2号
4. ニュース発行
Nos. 91, 92, 93 (計22頁)
5. 学会共催
第18回理工学における同位元素研究発表会(共催)
6. 例会
2/14 熱水系の同位体地球化学

(1) 日本の温泉水、火山噴気の起源

松葉谷 治氏

(2) 岩石・鉱物からみた熱水活動

松久 幸敬氏

6/13 新しい年代測定法

(1) 加速器による年代測定法の動向

中井 信之氏

(2) Sm-Nd 年代測定法の応用

中村 昇氏

1981年度決算報告 収 入 の 部

	円	(予算, 円)
1. 会 費	4,896,124	(5,386,000)
2. 刊行物売上	5,276,491	(4,584,000)
3. 広告料	0	(100,000)
4. 助成金	1,510,000	(1,500,000)
5. 雑収入	128,427	(50,000)
6. 名簿積立	250,000	(250,000)
7. 繰越金	3,343,232	(1,164,000)

計 15,404,274 (13,034,000)

支 出 の 部

1. 事業費	10,326,732	(10,605,000)
1.1. 出版費	8,276,257	(8,535,000)
会誌印刷	6,863,967	(6,900,000)
編 集 費	900,000	(900,000)
発 送 費	512,290	(735,000)
1.2. 行事費	244,000	(300,000)
1.3. 名簿印刷費	635,000	(500,000)
1.4. 事務委託費	1,113,195	(1,100,000)
1.5. 会員事務郵税	58,280	(170,000)
2. 管理費	999,729	(1,560,000)
2.1. 庶務費	250,000	(650,000)
2.2. 会議費	192,969	(300,000)
2.3. 通信費	8,450	(60,000)
2.4. 旅 費	292,400	(500,000)
2.5. 雑 費	31,810	(50,000)
2.6. 選挙費	224,100	(.0)
3. 次期繰越金	4,077,813	(869,000)

計 15,404,274 (13,034,000)

1982年度 事業中間報告

1. 会員現況 (1982年8月末現在)				
	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1981年12月末	843	13	4	860
入会	20	0	0	20
退会	2	0	0	2
1982年8月末	861	13	4	878
2. 年会・委員会等開催数				
年会	1	(¹⁰ / ₁₈ ~ ¹⁰ / ₂₀ , 沖縄)		
総会	1	(¹⁰ / ₁₉ , 沖縄)		
例会	2	(² / ₁₃ , ⁶ / ₁₂ , 東京)		
評議員会	3	(² / ₁₃ , ⁶ / ₁₂ , ¹⁰ / ₁₇)		
幹事会	2	(⁴ / ₁₇ , ⁹ / ₂₅)		
財政委員会	2	(⁶ / ₂₁ , ⁶ / ₁₀)		
会誌編集	2	ニュース	1	行事 2
3. 会誌発行				
G. J.	Vol. 15 (4, 5, 6), Vol. 16			
	(1, 2, 3) 計6号			
地球化学	Vol. 15 (2) 計1号			
4. ニュース発行				
Nos.	94, 95, 96 (計20頁)			
5. 学会主催・共催				
第5回地質年代学宇宙年代学同位体地学国際会議				
(⁶ / ₂₇ ~ ⁷ / ₂) (主催)				
第19回理工学における同位元素研究発表会 (共催)				
6. 例会				
2/13 生鉱物生成問題への私のアプローチ	北野 康氏			
6/12 マントルとは何か				
(1) 元素組成	小沼 直樹氏			
(2) 同位体組成	兼岡 一郎氏			
7. その他				

1982年度会計中間報告

1982年6月30日現在

収入の部

	円	(予算, 円)
1. 会費	4,774,891	(5,435,000)
2. 刊行物売上	1,678,450	(4,385,000)
3. 広告料	0	(100,000)
4. 助成金	1,610,000	(1,500,000)
5. 寄附	300,000	(0)
6. 雑収入	898	(0)
7. 繰越金	4,077,813	(869,000)

計 12,442,052 (12,289,000)

支出の部

1. 事業費	5,024,172	(10,355,000)
--------	-----------	--------------

1.1. 出版費	3,977,946	(8,535,000)
会誌印刷	3,288,086	(6,900,000)
編集費	450,000	(900,000)
送費	239,860	(735,000)
1.2. 行事費	250,000	(300,000)
1.3. 名簿積立金	0	(250,000)
1.4. 事務委託費	680,576	(1,100,000)
1.5. 会員業務郵税	115,650	(170,000)
2. 管理費	960,655	(1,400,000)
2.1. 庶務費	300,000	(400,000)
2.2. 会議費	92,435	(300,000)
2.3. 通信費	9,640	(50,000)
2.4. 旅費	501,200	(600,000)
2.5. 雑費	57,380	(50,000)
3. 予備費	0	(534,000)

計 5,984,827 (12,289,000)

1983年度 事業計画

1. 年会	1回
2. 総会	1回
3. 例会	2回
4. 評議員会	4回
5. 幹事会	2回
6. 会誌発行	
G. J.	Vol. 17 (1~6) 6号
地球化学	Vol. 17 (1) 1号
7. ニュース発行	
Nos.	97, 98, 99 (3号)
8. 学会主催・共催	
水・岩石相互作用国際研究集会 (主催)	
第20回理工学における同位元素研究発表会 (共催)	
9. 役員選挙	
10. 会員名簿発行	

1983年度予算

収入の部

	円	(前年度予算, 円)
1. 会費	5,000,000	(5,435,000)
2. 刊行物売上	4,300,000	(4,385,000)
3. 広告料	100,000	(100,000)
4. 助成金	1,600,000	(1,500,000)
5. 雑収入	60,000	(0)
6. 名簿積立	250,000	(0)
7. 繰越金	3,000,000	(869,000)

計 14,310,000 (12,289,000)

支出の部

1. 事業費	10,920,000	(10,355,000)
1.1. 出版費	8,530,000	(8,535,000)
会誌印刷	6,900,000	(6,900,000)
編集費	900,000	(900,000)
送費	730,000	(735,000)
1.2. 行事費	320,000	(300,000)
1.3. 名簿積立金	500,000	(250,000)
1.4. 事務委託費	1,400,000	(1,100,000)
1.5. 会員業務郵税	170,000	(170,000)
2. 管理費	1,371,600	(1,400,000)
2.1. 庶務費	300,000	(400,000)
2.2. 会議費	250,000	(300,000)
2.3. 通信費	50,000	(50,000)
2.4. 旅費	400,000	(600,000)
2.5. 雑費	100,000	(50,000)
2.6. 選挙費	100,000	(0)
2.7. 保管料	171,600	(0)
3. 予備費	2,018,400	(534,000)

計 14,310,000 (12,289,000)

1983年度日本地球化学会年会開催予定

— 課題講演の題目とコンビーナーを募集 —

昨年の年会会場で発表されましたように、1983年の年会は、東京都立大学・半谷高久教授の準備委員長のもとに八王子セミナーハウスで開催されることになりました。期日は10月17日(月)、18日(火)、19日(水)の3日間を予定しています。同セミナーハウスでの学会開催は1975年について2度目ですが、今回も全館貸し切りで使用できることになりました。前回にくらべ、さらに施設が充実し、約270名の宿泊が可能であり、また、セミナー室も大小合わせて20室あります。

東京都の田園地帯である八王子にお泊りいただき、秋の夜長を議論に花を咲かせ、親交をあたためてください。

本年度では、課題講演として現在、「社会地球化学」と「有機地球化学」の2つ(正式には内容はより限定される)が予定されていますが、ほかに課題講演を組織する希望がある人は、コンビーナーを選び、2月中に準備委員会あてお申し込みください。年会の詳細な案内は例年通り5月中旬に配布できるようにいたします。年会についてのお問い合わせは郵便番号158、東京都世田谷区深沢2-1-1、東京都立大学・理学部・分析化学研究室内 1983年日本地球化学会年会準備委員会 電話03(717)0111、内

線339, 340 小椋あてお願いします。

自然界における拡散現象…… 2月12日 例会

1. 深海底堆積物 大隅多加志(東工大, 理)
2. 造岩鉱物 森岡 正名(東大, アイソトープ総合センター)

とき 1983年2月12日(出) 14時~16時

ところ 東京大学理学部化学教室新館4階講義室
4th International Symposium on Water-Rock Interaction(第4回水-岩石相互作用国際集会)

場所: 鳥取県三朝温泉

会期: 1983年8月29日~9月8日

日程: 8月29日 Registration/Cocktail Party

30日 Opening Session

Technical Session

31日 Technical Session

9月1日 Field Trip

Business Meeting

2日 Technical Session

3日 Technical Session

4日~8日 Field Trip

上記シンポジウムの2nd Circularが発行された。このシンポジウムは、IAGCのサブグループ "Water-Rock Interaction" が3年毎に開催する国際集会で、続成作用、変成作用、火成作用、地熱活動、土壌、有機地球化学を含む広範な分野をカバーしている。第4回会議では、一般講演のほか、次の5つの special sessions が計画されている(カッコ内はコンビーナー)。

1. Active geothermal systems (S. Arnorsson)
2. Hydrothermal mineralization (H. Ohmoto)
3. Reaction kinetics in water-rock interaction (R. A. Berner)
4. Behaviors of isotopes in water-rock interaction (J. R. O'Neil)
5. Water-rock organic interaction (J. A. Boon)

三朝での講演会のあとは、人形峠、有馬、京都、箱根、富士山、丹沢を見学して、9月8日夕、東京で解散する field trip が計画されている。

2nd Circular をご希望の方は、下記に請求してください。

連絡先: 〒682-02 鳥取県東伯郡三朝町山田

岡山大学温泉研究所 酒井 均

電話 08584-3-1211

WRI-4 2nd Circular

Clarke Medal Committee (The Geochemical Society) からのお知らせ

毎年クラーク・メダル授賞のための選考が行われていますが、1983年度の推選候補を公募します。

●地球化学・宇宙化学の分野に大きく貢献した成果が過去5年以内に公表印刷されていること。

●国籍および学会員であるか否かは問わない。

●×切：1983年3月末日。(4月末日までにcouncilに答申するため)書式等については下記にお問い合わせください。

連絡先および送付先：

〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課 倉沢 一
(0298)54-3556

(Clark Medal CommitteeのChairmanは
Karlis Muehenbachs, Alberta大学)
日本学術会議第13期会員選挙について

1. 前回(第12期, 昭和55年)の選挙の有権者で日本学術会議中央選挙管理会から登録用カードを再提出されるよう通知のあった方以外は、引き続き有権者名簿に登録されます。

2. 今回(第13期, 昭和58年)の選挙に新たに有権者となる事を希望される方はハガキに“登録用カード用紙請求書”として住所・氏名・印鑑を押して、中央選挙管理会へ登録用カードを請求してください。所属機関を通じ、一括請求されてもかまいません。登録用カードの受付期限は昭和58年2月28日です。

3. 有権者の氏名・本籍・住所・勤務機関・勤務地・職名に異動があった時、または博士の学位を取得したり、名誉教授の称号を授与された時は“有権者異動届”を出してください。

提出先 〒106 東京都港区六本木7-22-34
日本学術会議中央選挙管理会

1982年度第2回日本地球化学会評議員会報告

日時：1982年6月12日(土) 17時5分～20時10分

場所：学士会館 本郷分館

出席者：北野 康会長、松尾 禎士副会長、
一國 雅巳、岡部 史郎、小椋 和子、
小倉 紀雄、兼島 清、桑本 融、
椎川 誠、杉村 行男、田中 重男、
田中 剛、角皆 静男、寺田 喜久男、
野津 憲治、半田 暢彦、増田 彰正、
馬淵 久夫、水谷 義彦、各評議員

I 前回議事録を承認した。

II 報告

1. IAGC関係(増田評議員)

地球化学宇宙化学研究連絡会の委員長に本田雅健会員を選出し、隕石関係の地球化学の将来計画を検討することになった。

2. 菅原名誉会員の逝去について(北野会長)
菅原名誉会員は5月9日逝去された。5月20日の告別式では献花と弔辞献上をした。

3. 幹事会(半田評議員)

第1回幹事会を4月17日(土)に開催した。

○日本学術会議の隕石学宇宙化学小委員会の委員として、小沼直樹会員を推薦した。

○1984年12月6～21日にホノルルで開催される日米加化学会による1984環太平洋国際化学会議の準備委員会への本学会の参加要請が日本化学会よりあり、石渡良志会員を委員として推薦した。

○文部省科学研究費の研究領域の特別研究課題について協議した。

○1982年度年会の課題講演項目を選定した。

○6月12日(土)開催の例会のテーマを“マントルとは何か”に決定した。

4. 庶務委員会(半田評議員)

会員名簿、ニュース、要旨集の寄贈の要望については、寄贈は断り、購入してもらうことにした(会員名簿、ニュースの価格は庶務委員会に一任)。

5. 財政委員会(小椋評議員)

○未納者からの会費の回収のため、未納者リストを作成し、納入の促進を計っている。

○各委員会から1983年度予算を提出して頂き、とりまとめている。

6. 編集委員会(一國、小倉両評議員)

○レフェリーへの謝礼を編集委員会経費より支払う。

○G. J. : 増田前委員長と相談のうえ、編集委員を決定した。Vol. 16-No. 2は印刷中である。

○地球化学：Vol. 15-No. 2は印刷中であるが、Vol. 16-No. 1(CO₂特集号)は遅れている。No. 2は東京湾特集号を予定している。総説の著者には別刷を贈呈する。

7. 行事委員会(野津評議員)

6月12日(土)例会“マントルとは何か”を開催した。

8. ニュース発行委員会(田中剛評議員)

○No. 95は5月4日発行した。No. 96は7月末原稿×切、8月末発行の予定で、年会プログラムが主となる。

○No. 95は1,000部印刷し、そのうち50部を国公立

大・理学部、地学関係へPRとして配布した。

9. 財政小委員会(松尾副会長)

委員として綿拔邦彦、小椋和子、角皆静男会員を選出した。5月21日(金)、6月10日(土)に開催し、財政健全化の方策について検討した。

III 議事

1. 1982年度年会について

課題講演題目として3テーマを決定した。

2. 雑誌の保管料について

日本学会事務センターにおける雑誌の保管料については、契約内容をよく調べたうえで支払い、今後の対策を検討する。

3. 財政問題について

小椋会計委員より、財政の現状について説明があり、1983年度に赤字になる可能性の大きいことが指摘された。松尾財政小委員長より、財政充実のための収入増と支出減の方策について提案がなされた。協議の結果、財政充実のための項目について調査、検討し、幹事会で1983年度会費値上げに関する協議を行うこととした。また、財政の現状をニュースNo. 96で会員に知らせる(文責：松尾財政小委員長)。1983年度会費値上げの場合は、総会の議題として事前に会員に通知することとした。

4. 入退会について

1982年4月末までの入会は11名(学生2名)、退会12名で、4月末現在の会員数は、正会員790名、学生会員24名、賛助会員13名、名誉会員4名、計831名となった。

日本学術会議第4部地質学研究連絡委員会

地球化学・宇宙化学研究連絡会(第12期第2回)議事抄録

日時：1982年6月14日(月) 13:30～17:00

場所：日本学術会議会議室

出席者：本田(委員長)、松尾、野田、清水(以上幹事)

黒田、猿橋、秋山、増田、小嶋、柴田、武田、

(以上11名は今期本研連の全員である)

会議に先立ち本研連およびIAGCに功労のあった菅原健氏の逝去が披露された。

報告事項

(1) IGC検討委員会(1992年にIGCを日本で開催する件)

黒田委員より経過報告あり。事務局(担当者)、会場(3,000名収容)、財政(2.5億円程度)、巡検等の問題点が指摘されている。

(2) 隕石学・宇宙化学小委員会

委員の推薦を関連研連等に依頼し回答が出揃った。

(幹事：本田、増田、武田、委員：長谷川、永田、矢内、小嶋、野田、清水、小沼、松井、田中(剛)、)

(3) 学術会議関係

学術会議よりの海外会議代表派遣の枠は会員および研連委員とすることとなった。研連委員定数は1名減(11名)となったが旅費のつかない“C委員”の追加は可能である。

改革問題について現状報告があった。選挙規則・任期の改定等自主改革路線と政府側の意見との調整が難問である。

(4) その他

増田委員よりアイスランドレキヤビックにおけるIAGC評議員会の報告をうけた。財政上の問題が指摘された。新しい作業部会等として国際標準試料、地球化学教育、健康と病気の地球化学、地球外物質などが主題としてとりあげられた。

審議事項

(1) 固体地球科学研究所(仮称)小委員会委員推薦

従来地質研連内に設置されていたが、今度第4部附置の小委となった。地物、地質、鉱物、地化、宇宙空間各研連より3名宛推薦の依頼があった。本研連として投票の結果、増田、小沼、本田、小嶋の四氏をこの順位で候補者として推薦することにした。

(2) 前出の研連C委員として地球化学会より推薦のあった酒井均氏(岡山大)を推薦することを申合せた。

(3) 地球化学・宇宙化学将来計画(本研連としては将来計画の審議をはじめたが)

増田委員より地球化学会関係者を交えた懇談の経緯の説明があり、特定研究の可能性等更に検討中との報告があった。各委員より交々発言があり、我が国の地球化学のあり方について率直な意見の交換が行われた。

地球化学を学問としてとりあげる場合隣接諸分野との関連に問題がある。地球化学が独立しにくい特異性を考慮すべきである。地学自体もまた日本では落ちこぼれたのではない。歴史的に日本の地球化学は諸外国と異っている。化学の分析手段から出発しており「地球」はあともわしになっている。排他的な縦割り社会では認知されにくいのが現状である。地球化学科とか地球化学部も考えられようが、むしろ大きなfacultyとして地学部内で、地学の研究教育が考慮されるべきであろう。

(上記抄録は来たる2月21日第3回研連委員会で承認予定の議事録案より作成したものであり、現在の所委員長(本田)の個人的メモにすぎません。しかし研連における討議内容を早期に地球化学会員に伝えること

を念願しており、原則的には了解が得られておりますので、非公式ながら抄録して本ニュースの記事として投稿したものであります。(本田雅健)

第5回地質年代学・宇宙年代学・同位体地学国際会議報告

日本地球化学会・日本地質学会主催、日本学術会議後援により標記国際会議が1982年6月27日から7月2日まで、栃木県日光市総合会館において開催された。以下にその概要を報告する。

1. 参加者: 22ヶ国より374名, うち外国人221名, 同伴者43名であった。参加国と人数は, 日本163, 米国77, カナダ22, 西ドイツ21, オーストラリア・フランス各19, 中国12, イギリス11, ソ連7, イタリア・インド・メキシコ・オランダ各3, デンマーク・サウジアラビア各2, ベルギー・東ドイツ・韓国・クエート・マレーシア・ニュージーランド・スイス各1, である。また, 講演論文数は220編であった。

2. 招待講演

I. McDougall: ^{40}Ar - ^{39}Ar 年代スペクトル法の岩石に対する応用

R. Davis: 太陽ニュートリノの実験

林忠四郎: 惑星系の進化

3. 特別課題討論

1. 同位体にもとづく地殻・マントルの進化

2. 地球の希ガス

3. 同位体と古環境

4. 宇宙起源核種

4. 一般講演

地質年代学: 地域年代学, 堆積岩, 放射能, 岩石成因論, 新技術

宇宙年代学: 同位体異常, 隕石, 新技術

同位体地学: 同位体分別作用, 熱水作用, 水文学堆積環境

5. ポスターセッション: 放射起源同位体データバンク

6. ワークショップ: フィッシュトラック年代測定

7. 教養講演会: 馬淵久夫: 銅鐸のPb同位体による日本の古代史

8. ファミリープログラム: お花, 小学校見学, 鹿沼盆栽, お茶(222名参加)

9. 総会: 次回(第6回)は1986年夏に英国ケンブリッジで開催することが決定した。

10. 野外巡検: Aコース(中部日本)7月3日~8日, 21名

Bコース(富士・箱根・伊豆)7月3~6日, 57名

11. 出版物: 要旨集(B5版, 427ページ, 送料共3,500円, 連絡先: 地質調査所 柴田賢, 0298-54-3557) (柴田賢)

田中重男博士(東大原子核研)の御逝去を悼んで
北野 康

日本地球化学会評議員田中重男博士は1982年10月19日脳出血で突然亡くなってしまった。1982年10月19日琉球大学で地球化学会の年會が開かれていた第2日目の朝, 私は緊張して会場に入った。途端に田中さんが急死してしまったと真実とは思えないことを報らされた。特に田中さんと親しかった人々の衝撃を受けた顔々を通して, 私も動天した。田中重男さんが座っていてくれるだけでその會合は“良識”からはずれることはないと安心できる何かを彼は常にもっていてくれたのにと, 胸がつぶれる思いをした。信じがたいことを, しかし私は当日開かれた總會で會員にお伝えしなければならなかったし, 今また紙面を通してお報らせするのである。田中さんにはゆっくりお休みくださいと, そうして御遺族にはお悔み申し上げますのみである。

元地球化学会會員田中重男氏(東京大学原子核研究所)の追悼文集「残照田中重男」が出版されました。御希望の方は下記へお問い合わせください。

〒188 東京都田無市緑町3-2-1

東京大学原子核研究所化学室(今村峯雄)

電話 0424-61-4131(内線228または229)

人のものをうらやましがる會員より

御存知の方も多いと思いますが, 近頃“週刊地震学情報”というA4判十数ページのミニコミ紙が出ています。各研究機関の持ち回りで, 院生クラスの自由編集による“何でも雑誌”です。なかなかおもしろい記事もあり, 昨年すでに112号を数えました。地球物理の学生のActivityにおどろくとともに, 地球化学でもせめて“月刊元素の動き”ぐらいは出せないものかと思っています。

ニュース記事や御意見をお寄せください

本ニュースは年3回(大体5月, 9月, 1月)発行されます。記事は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回98号は4月15日/切5月上旬発行の予定です。—ニュース編集係—

編集者 田中 剛, 清水 洋
〒305 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 地球化学課
電話 0298 (54) 3558
発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京 03 (815) 1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 98

1983. V. 10

選挙公示

日本地球化学会 1984・1985 年度役員選挙の

立候補者および推薦候補者の届出について

1983年5月1日

日本地球化学会役員選挙管理委員会

本会会則により1984・1985年度役員の選挙を次の日程で行ないます。

立候補者・推薦候補者締切 7月31日(必着)

選挙公報・投票用紙・會員名簿発送

8月25日

投票締切 9月30日(必着)

選挙結果公表(総会) 10月18日

つきましては, 下記により, 会長・副会長・評議員に対してそれぞれ立候補者および推薦候補者の届出をしていただくようお願いします。

1. 会長1名, 副会長1名, 評議員20名を選出します。

2. 立候補者の届出は, 届書を立候補者自身が, I) 本委員会に持参するか, またはII) 本委員会宛に送付して下さい。

3. 推薦候補者の届出は, 推薦候補者名と推薦者名を記した届書に, 推薦候補者の承諾書をそえて, 推薦者またはその代表者がI) 本委員会に持参するか, またはII) 本委員会宛に送付して下さい。なお役員選出細則第8条により次の方は次期評議員に選出することができません:

一 国雅巳, 桑本融, 酒井均, 杉村行勇, 松本英二, 馬淵久夫

4. 第2項と第3項に記した以外の方法で届出が行なわれた場合には, 届書をうけつけることができません。郵送の場合は, 「書留郵便」として下さい。届書の封筒の表に(選挙)と記入して下さい。

5. 届出の締切は, 1983年7月31日(必着)です。

6. 本委員会の所在地は次の通りです。

東京都台東区上野公園13-27(〒110)

東京国立文化財研究所 馬淵久夫

1983 年度年会は八王子で開催

1983年度日本地球化学会年会を次のスケジュールで開催いたしますので、ふるってご参加下さい。会場には270名まで宿泊できる施設があります。宿泊のお世話もいたしますので、できるだけ多くの方々に利用していただきたく、ご案内申し上げます。

会場 大学セミナーハウス

〒192-03 東京都八王子市下柚木1987-1

電話 0426 (76) 8511 (代表)

日時 10月17日(月)～10月19日(水)

総会および懇親会は18日(火)におこないます。

内容 一般講演、課題講演および特別講演

課題講演は(1)社会地球化学(範囲を広く解釈し、種々様々の環境汚染、人間活動による地球環境の変貌などの諸現象を含みます)、(2)有機地球化学の2テーマを計画しています。課題1のコンピーナーは半谷高久(都立大)および安部喜也(国立公害研)、また、課題2は石渡良志(都立大)および田口一雄(東北大)の各氏が担当します。

申込

大会参加および宿泊希望者は、講演の有無にかかわらず、所定の申込用紙に必要事項を記入し、6月25日(土)までに到着するように準備委員会宛に送って下さい。申込用紙のない場合はご請求下さい。

1. 要旨原稿の締切

講演申込みが到着次第、要旨原稿用紙を送付いたしますので、書き方の案内に従って記入し、8月13日(土)までに到着するように準備委員会宛に送って下さい。

2. 参加費、懇親会費の送金方法

参加費は会場費として1500円、要旨集として3500円で合計5000円です。要旨集のみご希望の場合は、3500円送金いただければお送り致します。

懇親会は、学生が2500円、一般(学生以外)は4000円です。以上の費用は8月31日(水)までに郵便振替で送って下さい。

申込先

〒158 東京都世田谷区深沢2-1-1

東京都立大学・理学部・分析化学研究室内

1983年度日本地球化学会年会準備委員会

委員長 半谷高久

電話 03 (717) 0111, 内線339, 340

郵便振替

名称: 1983年度日本地球化学会年会準備委員会

東京 6-20164

〈宿泊〉

大学セミナーハウスの宿泊施設は次の通りです。

先着順で予約を受け付けたいと思いますが、年令等を考慮して当方で若干変更させていただくこともありますので、あらかじめご了承下さい。

A (一般宿泊用) 2人用, 100室 1泊2700円
1人の場合 3200円

B (国際セミナー館) 1泊3400円
B-1 1人用 3室, B-2 2人用 3室,
B-3 3人用 1室,
B-4 4人用 6室, B-5 3人用 1室
(和室)

C (教師館) 1泊 3600円
C-1 1人用 7室, C-2 2人用 1室(1
人の場合4400円)

D (ゲストルーム)
D-1 2人用 1室 1泊3600円(1人の場
合4400円)
D-2 2人用 2室 1泊2900円(1人の場
合3900円)
D-3 1人用 1室 1泊3600円

〈食事〉

周辺に食堂がありません。あらかじめお申し出下さい。

朝食: 480円, 昼食: 570円, 夕食: 950円, 1日2000円です。

宿泊代および食事代はセミナーハウス到着の際にお支払い下さい。

南極地球化学研究集会

南極地球化学研究集会を6月の地球化学例会の前日(6月10日、金曜日)午後4時より東京大学教養学部で開く予定です。今迄のまとめと反省、今後の方針、サンプルの処理など皆様と御相談したいと思います。御関心の方は下記に問合せて下さい。

〒153 目黒区駒場3-8-1

東京大学教養学部化学教室(綿抜邦彦)

電話 03-467-1171 (内線432または415)

考古学と地球化学の接点——6月例会——

とき: 6月11日(土)午後2時から4時まで

ところ: 東大理学部化学教室本館4階講義室

①小池裕子(埼玉大, 教養)

貝塚産貝殻の酸素同位体組成—貝類の酸素同位体組成から7000年前に溯る先史時代の古環境の推定を行なった。

②馬淵久夫(東京国立文化財研)

青銅器と鉛同位体組成——出土される青銅器中の鉛同位体組成から古代日本で使われていた金属材料の起源を求め、古代日本の交貿関係を追求する。

Hydrochemical Balances of

Fresh Water Systems——国際シンポジウム

標記シンポジウムが1984年9月10～14日にスウェーデンのStockholm/Uppsala地区で開かれる予定で下記のようなテーマが企画されています。

1. Water interaction with soil and rock: Processes and time perspectives.
2. Description and analysis of sorption-desorption phenomena in natural systems.
3. Data collection, adequate distribution in space and time (atmospheric water, soil moisture, groundwater, surface water).
4. Water quality problems in developing countries.
5. Hydrochemical budgeting and modelling for catchment areas, lakes and other hydrological units.
6. Hydrochemical and sediment-geochemical data as a tool for deciphering hydrological processes.

詳細は下記にお問い合わせ下さい。

International Symposium on Hydrochemical Balances of Fresh Water Systems

c/o Stockholm Convention Bureau, Jakobs Torg 3

S-111 52 Stockholm, Sweden

From Asteroids to Meteorites——シンポジウム

標記シンポジウムが西ドイツ Mainz で隕石学会の中で開かれ(本年9月7～8日、隕石学会は5～9日)下記のテーマが企画されています。

1. Chemistry of asteroid surfaces as revealed by spectrophotometry.
2. Nature of asteroidal regoliths as revealed by meteorite studies.
3. Mechanics of fragmentation.

4. Theoretical and cosmic-ray exposure evidence for a series of fragmentation events.
5. Dynamical processes for transfer of fragments into Earth-crossing orbits and the role of Apollo-Amor objects as meteorite sources.
6. Entry of meteoroids into the atmosphere, atmospheric selection, and recovery of meteorites.

詳細は下記にお問い合わせ下さい。

H. Wänke

Chairman IAGC Commission on Extraterrestrial Geochemistry

Max-Planck-Institut für Chemie Saarstr. 23;
65 Mainz, F.R. Germany

2冊の良い本を紹介します

① 日本地質アトラス

発行: 地質調査所, 昭和57年9月

大きさ: A3版(見開きA2版)119ページ

うち多色刷60ページ

内容: 地質図(1/100万)、放射年代図(1/400万)、
鉱床、温泉分布図(1/400万など)他18図
解説、付属資料等満載

価格: 29,200円(送料別)

申込先: 東京地学協会(Tel: 03-261-0809)

地学文献センター(Tel: 0423-62-5050)

その他書店

② W. S. Broecker および T. H. Peng 著

(Tracers in the Sea)

米国の海洋化学は1970年代に GEOSECS 計画を実施して飛躍的に発展しました。これを Broecker 教授らがまとめたのが本書です。海洋で現在起っている炭素や栄養塩のサイクルなどの化学的過程の記述が中心ですが、過去の氷河時代における化学成分の分布の推定や未来の人類活動による分布の予測などにも筆はおよんでいます。さらに、生物活動に基く粒子の運命も議論し、これらの議論には放射性核種が最大限活用されています。

本書は海洋化学以外の方々にも役に立つものと思い紹介する次第です。購入希望者は直接出版社(Eldigio Press, Lamont-Doherty Geological Observatory Columbia University, Palisades, N. Y. 10964)か、函館市港町3-1-1、北大水産学部分析化学講座にご注文下さい。

なお、本書は700ページ、図表300、文献(説明つき)750がつけられ、一部35ドルです。(角皆 静男)

日本学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡会（第12期第4回）より

1983年2月21日 午後上記会合が行われた。

出席者 11名

報告事項

1. 学術会議改革案

学術会議より提出されたいわゆる自主改革案と総務長官試案との調整中であり、場合によっては第12期の任期を1ヶ年延長する可能性がある。各研連委の再検討も行われている。

2. 各種国際会議

我が国で開催の国際会議について報告があった。万国地質会議（IGC）の1992年日本開催問題に対しては前向きに検討が進められている。

3. IAGC 評議員会は今年8月三朝で予定されている。

現評議員（8名）の半数が次期に改選される。次期会長にはスイスの Grünfelder（現副会長）が予定されている。

4. ユネスコ後援の South Asia Network for Geosciences 計画に日本が加盟する意思表示が行われた。国内では国際地質対比計画（IGCP）の中に小委をつくることになった。

5. ICSU 内の高レベル放射性廃棄物処理

小委員会は3年間の検討の結果、同廃棄物は今後100年の間保持を続けてから最終処理を行うことを勧告して解散した。本問題の重要性に鑑み学術会議内同小委は存続されることになった。

6. 自然史科学研究センター設立小委員会

（地質研連内）は今後地球化学関係分野よりの協力を日本地球化学会に対して要望する予定である。

審議事項

1. 年代測定センター（仮称）設置について小嶋委員より要望書が提出された。この問題の緊急性を認め、とりあえず本研連内に年代測定小委を発足させることにした。

小委員会の構成は、小嶋（委員長）、本田、黒田、柴田各研連委員のほか、高岡（山形大）、安川（神戸大）、中村（東大震研）の三氏とし、具体案を練ることとなった。

2. 将来計画

地球化学を中心とする特定研究の申請を目標に総研B「地球表層における炭素の動態に関する研究」（代表者：北野康）の申請が行われた。

3. その他

前回は地球化学会ニュースに本研連関係記事を掲

載することを試みたが、今後は更に非公式な体裁とし事前の検討を経て寄稿することが論議された。（尚、前回記事で、黒田委員は本研連幹事であること。また会合は「第3回」であること等誤りがありましたので訂正致します。）（本田雅健）

1982年度 第3回 日本地球化学会

評議員会 議事録

日時：1982年10月17日（日） 17時5分～20時30分

場所：那覇セントラルホテル

出席者：北野 康会長 松尾禎士副会長

一國雅巳 岡部史郎 小椋和子

小倉紀雄 兼島 清 木越邦彦

酒井 均 椎川 誠 島 誠

田中 剛 角皆静男 寺田喜久雄

野津憲治 半田暢彦 増田彰正

松本英二 水谷義彦 各評議員

I. 前回議事録を承認した。

II. 報告

1. 飯盛名誉会員の逝去について（北野会長）
飯盛名誉会員は10月13日逝去された。10月15日の告別式では献花と弔辞の献上をした。

2. 幹事会（半田評議員）

第2回幹事会を9月26日に開催した。

○日本学会事務センターにおける雑誌の保管料が本年分について請求された。

これに関連し、GJについては、印刷部数を1500部から1400部に削減することにした。

○財政小委員会に一國編集幹事を加えることとした。

○1983年度学会費値上げについては、収入増と支出減について検討したうえで、見送ることとした。

○菅原先生をしのぶ記事を地球化学誌に出すこととした。

○GJの一國編集幹事より Associate Editor を30名から25名にしたいと提案があり、種々意見交換の後これを了承した。

3. 庶務委員会（半田評議員）

○菅原名誉会員の退会手続きをとった。

○文部省刊行費補助金は本年度161万円と決定した。

○第20回理工学における同位元素研究発表会の共同主催を承諾した。

4. 編集委員会（一國、小倉両評議員）

○GJ：vol. 16 No. 3は既刊、No. 4は10月中に印刷完了、No. 5は原稿が揃った。No. 6については

原稿が一部集まったところである。

○地球化学：vol. 16 No. 1をCO₂特集号とする予定であったが、遅れているためNo. 2にまわした。No. 1は印刷中である。年会の課題講演「サンゴ礁の地球化学」の特集号を計画している。

5. 行事委員会（野津評議員）

○来年度年会は都立大で行うことで交渉した。

○2月例会については演者と交渉中である。

6. ニュース発行委員会（田中評議員）

○No. 96 年会プログラム主体で刊行し、50部をPRに配布した。

○No. 97 原稿1月末まで切り、2月発行の予定である。

7. 国際年代学会（松尾副会長）

○6月27日～7月2日に開催された第5回地質年代学宇宙年代学同位体地球学国際会議の内容について説明があり、本学会への感謝の意が表された。

○Abstract集を出した。

○剰余金については、組織委員会より本学会へ委託することになった。

III. 議事

1. 1982年度日本地球化学会総会について、半田庶務幹事より、例年通りに行いたいとの提案があり了承した。

2. 1981年度事業および決算報告について
半田庶務幹事および小嶋会計幹事から説明があり了承した。

3. 1982年度事業および会計中間報告について
○半田庶務幹事より事業中間報告について説明があり、了承した。
○小嶋会計幹事より6月末現在での会計中間報告の説明があり、了承した。

4. 1983年度事業計画および予算案について
○半田庶務幹事より事業計画について説明があり、来年度年会を都立大にお願いすることにし、10月17日（月）～19日（水）に八王子セミナーハウスで開催することも含めて了承した。

○松尾財政小委員長より予算案について説明があり、①1983年度からの評議員会、幹事会への旅費支給2回／年を1回／年とする。②雑誌の別刷代を値上げする（値上げ巾については幹事会一任）。③GJの単価を2,300円から2,800円に値上げする（関連して会員のいい論文の投稿が要望された）。④名簿の印刷を1回／2年を1回／4年とする。予算案を一部手直しをした後、これを了承した。

5. 国際年代学会からの委託金について

組織委員会より剰余金550万円について、今後の国際年代学会への、40才以下の出席者への援助に使うことを条件に、本学会に委託された。協議の結果、幹事会で対処の方法を検討のうえ各評議員の意見を聞くことにした。

IV. その他

1. 水一岩石国際会議について（酒井評議員）

○本学会が共同主催の水一岩石相互作用国際研究集会は1983年8月29日～9月3日に三朝で行う。

○Chemical Geologyがこの集会のSpecial Volumeを出す予定である。

2. 菅原先生の御遺族からの寄付について（松尾副会長）

30万円の寄付を頂いた旨、報告があった。

入会申込受付リスト（1982、12月現在）

コード	氏名	所 属	備考
1228	加藤義久	東海大学海洋学部	
1229	高橋一暢	カナエ塗料㈱	
1231	高橋徹夫	伊勢化学工業㈱研究所	
1232	清水 明	新日本製鉄㈱開発企画本部	
1233	梁 漢	東京大学海洋研究所	
1227	福田 理	地質調査所	6名

退会届受付リスト（1982、12月現在）

コード	氏名	所 属	備考
	菅原 健		
	揖 博幸		学生
	牛来正夫		
	五十嵐俊雄	地質調査所	
	今井信親		
	中山邦明		
	繁沢和夫		
	田中唐男		
	井戸垣正俊		
	相模中央化学研究所		賛助

会員現況（1982年 12月現在）

	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1982年8月	861	13	4	878
1982年12月	858	12	3	873
	△3	△1	△1	

マイコン雑学

ここ数年來のマイコンブームで、どこの研究室にも1台や2台は必ずマイコンが存在するようになってきました。実験室内での利用法も多種多様になり、複雑な科学技術演算も何のその膨大なデータの統計処理やグラフ表示、計測機器の自動制御、はては英文和文のワードプロセッシングも1台の汎用マイコンで楽々こなせるようになってきました。最近ではマイコンと大型計算機との間でのデータのやりとりも楽に行なえるようになり、これからも増々研究室内で幅をきかすこと間違いなしです。小生もこれまで大型計算機に対しては苦手意識を持っていたが、マイコンは気軽にさわれてすこぶる親近感を持っています。もともと小生は複雑な計算や、大きなデータ処理などとは無縁な人間でして、ちょっとした計算やシミュレーションをやっては喜んでいます。最近の興味としては、地球化学データのミニデータベース化と、使用している分析機器の自動計測化です。前者は「四畳半的」発想のような気もしますが、趣味と実益を兼ねさせればけっこう楽しいだろうと思っています。後者については、少々必要にせまられています。エレクトロニクス音痴の小生には難問であります。そこで提案ですが、近い将来「地球化学とマイコン」などと題したシンポジウムを開いてはいかがでしょうか。又、このニュースの前号で提案のあった地球化学版ミニコミ紙をつくって、紙上プログラム交換などやったらいかがでしょうか。CP/M等のOSを使えば異機種間でもオブジェクトプログラムのやりとりが可能ですから、大学・研究所間でディスクットの交換をするのも悪くないと思います。いかなかなものでありましようか。(K. U. 27才)

地質調査所発行の新しい標準岩石試料について

地質調査所(GS J)では我国の岩石を用いて化学分析用の標準試料(粉体)を調製し、国際共同研究により、主成分・微量成分・超微量成分・地質年代・同位体比等の分析・測定を行ってきました。JG-1(花崗閃緑岩)及びJB-1(玄武岩)は1967年と1968年に調製され、約15年間にわたり元素組成及び各種の測定量の検討が行われてきましたが、残念なことに在庫が底をついてしまいました。

そのため、地質調査所では昭和56年度より新たな標準岩石試料を調製する計画を立て現在進行中です。56年度及び57年度分の計6種の化学分析用粉体試料の調製を完了(1982年3月及び11月)し、国際共同分析を開始しました。前回のJG-1・JB-1のときと同様に分析値確立のため皆様の御協力がいたなければ幸

甚です。共同分析計画に参加される方は下記連絡先にお知らせ下さい。

JG-1・JB-1を含め、GS J標準岩石試料の産地・岩石は次の通りです。

JG-1 (1967)群馬県勢多郡東村大字沢入、沢入花崗閃緑岩(中粒黒雲母花崗閃緑岩)

JB-1 (1968)長崎県佐世保市妙観寺峠、北松浦玄武岩(アルカリ玄武岩)

JB-2 (1982)東京都大島三原山山頂、昭和熔岩(ソレイアイト玄武岩)

JB-3 (1982)山梨県南都留郡鳴沢村、富士・青木ヶ原熔岩(ハイアルミナ玄武岩)

JR-1 (1982)長野県小県郡和田峠北部、和田峠黒曜石(流紋岩)

JR-2 (1982)長野県諏訪市和田峠南部、和田峠黒曜石(流紋岩)

JGb-1 (1982)福島県田村郡、阿武隈、移ヶ岳、(斑れい岩)

粉体試料は1びん約100g入り、各約1,000試料調製。

JG-1・JB-1は現在再調製中です(JG-1a・JB-1aとして本年度末迄に調製完了予定です)。

連絡先: 〒305, 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3, 工業技術院地質調査所技術部化学課標準試料係(安藤 厚)

ニュース記事や御意見をお寄せ下さい

本ニュースは年3回(大体5月、9月、1月)発行されます。記事は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回99号は7月末/切9月上旬発行の予定です。—ニュース編集係—

編集者 田中 剛, 清水 洋
〒350 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 企画室
電話 0298(54)3572

発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(815)1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 99

1983. VIII. 30

1983年度 日本地球化学会年会

主催 日本地球化学会 共催 日本化学会
日時 10月17日(月)~19日(水)
会場 大学セミナーハウス(東京都八王子市下柚木1987-1)
電話 0426(76)8511(代表)
大会準備委員会 東京都立大学理学部 半谷高久
(東京都世田谷区深沢2-1-1) 電話 03(717)0111

	会場	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
17日 (月)	A	受 付	一 般 講 演			課題講演Ⅰ－1 (社会地球化学)					小 集 会	
	B		一 般 講 演			一 般 講 演						
	C		一 般 講 演			一 般 講 演						
	D		一 般 講 演			一 般 講 演						
18日 (火)	A		課題講演Ⅰ－2			一般講演		総会	特別 講演		懇 親 会 (本館)	
	B		課題講演Ⅱ－1 (有機地球化学)			課題講演Ⅱ－2						
	C		一 般 講 演			一般講演						
	D		一 般 講 演			一般講演						
19日 (水)	A		一 般 講 演			一 般 講 演						
	B		課題講演Ⅱ－3			課題講演Ⅱ－4						
	C		一 般 講 演									
	D		一 般 講 演			一 般 講 演						

会場名: A会場:講堂, B会場:長期研修館大セミナー室
C会場:大学院セミナー館, D会場:中央セミナー館

年会準備委員会会場本部:長期研修館

受付:本館1階にて前夜から行う。

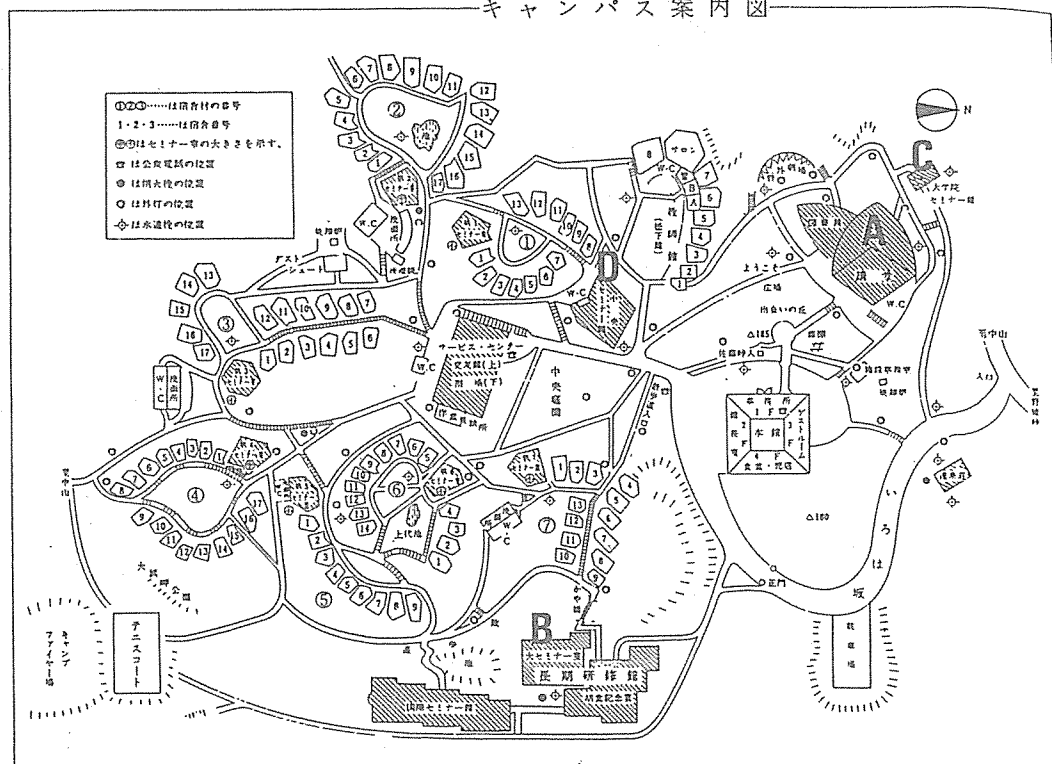
総会:10月18日(火)15時よりA会場にて開催

特別講演:10月18日(火)16時よりA会場にて貝塚爽平氏(都立大理)講演「東京湾の生い立ちと人工改変」

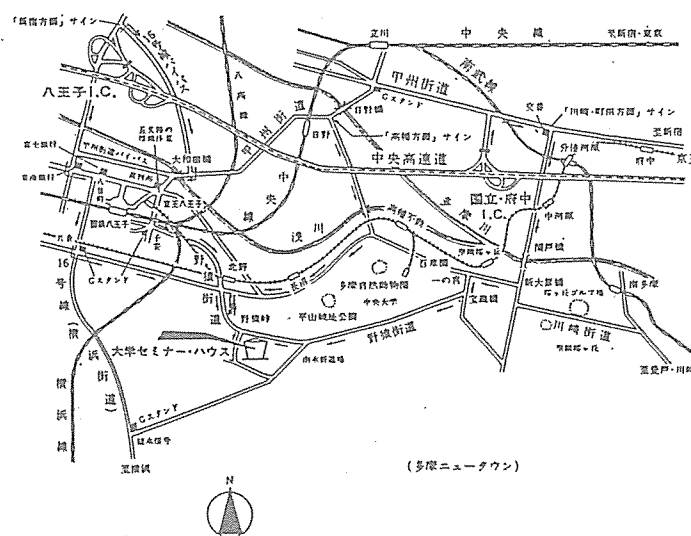
懇親会:10月18日(火)18時よりセミナーハウス本館にて行う。

会費 4,000円(学生2,500円)

キャンパス案内図



大学セミナー・ハウスへの交通



- 京王線
新宿-北野(急行40分、通勤快速50分、特急は高橋不動で各駅停車に乗り換え)
- 中央線(国電)
新宿-八王子(約50分)
- 京王バス
国電八王子駅南口、京王線北野駅とも「中央大学」または「由木折返場」行き(約15分間隔で運行)に乗り、「野狼(やえん)峠」で下車。バス停より徒歩5分。

第1日 10月17日(月)

A会場

一般講演 (9:30~10:45) 座長 金森 悟

- 1 A 01 北太平洋西部表面海水および大気中の二酸化炭素の安定同位体比について(気象研) ○井上久幸・杉村行勇
- 1 A 02 筑波における地上付近の大気中二酸化炭素の安定同位体比(気象研) ○井上久幸・杉村行勇
- 1 A 03 地表付近における大気中二酸化炭素の含量(その2)(気象研) 伏見克彦
- 1 A 04 筑波における地表付近大気中のオゾン含量(気象研) 伏見克彦
- 1 A 05 大気・降水中のトリウムの同位体について(気象研) ○広瀬勝己・杉村行勇
- (10:45~12:00) 座長 杉村行勇
- 1 A 06 硝化反応の分岐反応($\text{NH}_4^+ \rightarrow \text{N}_2\text{O}$)時の大きな窒素同位体効果(三菱化成生命研・東工大) ○吉田尚弘・松尾禎士
- 1 A 07 降水の安定同位体比の年変化(東農工大農) ○丹野忠弘・小倉紀雄
- 1 A 08 多摩丘陵の小流域における窒素収支(東農工大農) ○長井 潔・小倉紀雄
- 1 A 09 海洋大気上での二酸化硫黄の酸化およびアンモニアとの反応について(慶大理工) ○小田切幸成・吉森孝幸・田中 茂・橋本芳一
- 1 A 10 横浜地域における大気中の二酸化硫黄の酸化に関する環境化学的研究(慶大理工) ○田中茂・小田切幸成・竹中健一・橋本芳一

課題講演 I [社会地球化学 その1]

- コンビンナー 半谷高久・安部喜也
(13:00~13:50) 座長 安部喜也
- 1 A 11 社会地球化学と未来地球化学(都立大理) 半谷高久
- 1 A 12 (総合講演) 人工放射性物質の地球化学(気象研) ○杉村行勇・葛城幸雄・広瀬勝己・井上久幸
(13:50~15:00) 座長 一國雅己
- 1 A 13 (総合講演) 堆積物による環境変動史の解明(地調) 松本英二
- 1 A 14 東京湾海底土中の水銀分布(青山学院大理工・地調) ○岩崎公俊・平尾良光・木村 幹・松本英二
- 1 A 15 鉛同位体比からみた東京湾の鉛汚染(II)(青山学院大理工・国立文化財研・地調) ○平尾良光・福田悦子・木村 幹・馬淵久夫・松本英二

(15:10~16:10) 座長 小倉紀雄

- 1 A 16 伊勢湾堆積物における多環芳香族炭化水素の分布II(名大水圏研) ○佐藤茂之・半田暢彦・松永捷司
- 1 A 17 東京湾堆積物中の多環芳香族炭化水素の分布V-柱状堆積物に関する考察(都立大理・地調) ○尹 順子・石渡良志・塩谷 真・松本英二
- 1 A 18 都市水環境中のアルキルベンゼンIII-直鎖型および分枝型アルキルベンゼンの存在(都立大理) ○高田秀重・石渡良志
(16:10~17:30) 座長 河合崇欣
- 1 A 19 河口域底泥中のセレン(名古屋公害研) 伊藤和男
- 1 A 20 多摩川における塩素・臭素の挙動(武蔵工大原研) 平井昭司
- 1 A 21 霞ヶ浦周辺河川の水質(地調) 粕 武
- 1 A 22 胎土分析による古代土器流通の追跡(奈良教育大) ○三辻利一・山口一裕

B会場

一般講演 (9:30~10:45) 座長 松尾禎士

- 1 B 01 同位体原子の起源と希ガス原子間の重合融合 吉岡亀太
- 1 B 02 新しい特異いん石 Brachina の微量元素および Rb-Sr 年代(神戸大理・岡山大理) ○中村 昇・岡野 修・古味秀人・本間弘次
- 1 B 03 特異いん石構成鉱物中の微量元素: いん石相互の比較(島津製作所・神戸大理) ○古味秀人・中村 昇
- 1 B 04 いん石・月・地球のセリウム同位体比(神戸大理・米国地調) ○中村 昇・立本光信・K. Ludwig
- 1 B 05 熱変成過程における希土類元素の挙動-特に Allegan (H 5) の場合-(神戸大理) ○西川賢之・中村 昇
(10:45~12:00) 座長 中村 昇
- 1 B 06 中国に落下した頑火輝石球いん石、清鎮(国立科学博物館・理研) ○島 正子・若林文高・岡田昭彦
- 1 B 07 微量元素からみたオーブライイトとダイオジェナイトの起源(群馬大教養・シカゴ大) ○海老原充・E. アンダース
- 1 B 08 始原いん石中の Xe, Kr の同位体異常とその星内核合成起源説(金沢大理) 坂本 浩
- 1 B 09 220nm 吸収を示す炭素質物質の光学特性と物

- 性一星間物質の合成(その1)(電通大・東大)○坂田 朗・和田節子・瀬野尾修・田辺俊彦・尾中 敬
- 1 B10 水素雰囲気下で合成した炭素質物質の光学特性と物性一星間物質の合成(その2)(電通大・東大)○和田節子・坂田 朗・橋本 満・新谷治生・尾中 敬
(13:00~14:15) 座長 坂本 浩
- 1 B11 日本産コンドライトの希ガス同位体分析(山形大理・国立科学博物館)○高岡宣雄・島正子
- 1 B12 いん石中のセリウム同位体比(東大理・地調)○清水 洋・増田彰正・田中 剛
- 1 B13 3種のエコンドライト(Kapoeta, Juvinas, Roda)中の希土類元素と主成分元素の化学的研究(東大理)○高橋和也・増田彰正
- 1 B14 1975-1976年(東京)における¹⁰Beの降下率測定(東大核研・日大文理・東大理・九大理・東大原セ・愛媛大理)○井上照夫・今村峯雄・柴田誠一・永井尚生・吉田邦夫・山下 博・小林絃一・山根 功・長谷部信行
- 1 B15 東北日本弧火山岩中の¹⁰Be/⁹Beとサブダクション(東大核研・山形大理・日大文理・東大理・九大理・東大原セ)○今村峯雄・井上照夫・高岡宣雄・永井尚生・吉田邦夫・山下 博・小林絃一・山根 功・大場与志男
(14:15~15:00) 座長 和田英太郎
- 1 B16 チベット高原の雪氷、天然水の同位体組成(名大理・京大工)○浅野 晃・中井信之・西山 孝
- 1 B17 北アルプス内蔵助沢万年雪の安定同位体比とトリチウム濃度(富山大理)○日下部実・佐竹 洋
- 1 B18 昭和基地における降雪の $\delta^{18}\text{O}$ と気温の月平均値の関連性(名大水圏研)加藤喜久雄
(15:15~16:00) 座長 門谷 茂
- 1 B19 太平洋上エアロゾルの脂質成分(名大水圏研)大田啓一
- 1 B20 高等植物からの揮発成分について(名大水圏研)大田啓一
- 1 B21 著しい偶数優位性を示すHydrocarbonの起源について(愛知学院大教養・フロリダアトランティック大)○西村弥亜・E. W. Baker
(16:00~16:45) 座長 福島和夫
- 1 B22 土壤腐植の金属錯化容量一錯化容量と腐植化度との関連性について一(京都府大農)○山田秀和・宮田佳久・服部共生

- 1 B23 希塩酸くり返し抽出により溶出する土壌有機成分の酸化分解生成物(足利工大)○小林公子・小平 潔
- 1 B24 泥炭土壌中の α -ヒドロキシ安息香酸、バニリン酸およびフェルラ酸の分布(神奈川衛短大・帯広畜産大環境土壌)○片瀬隆雄・近藤 鍊三

C会場

- 一般講演 (9:30~10:45) 座長 坪田博行
- 1 C01 西部北太平洋域大気中の大陸起源物質の季節的・時間的変動(北大水産)○鈴木利孝・角皆静男・倉田隆喜
- 1 C02 日本周辺における大気中²¹⁰Pbの変動と北太平洋への輸送過程(北大水産)○倉田隆喜・角皆静男
- 1 C03 大気一海洋間における二酸化炭素の交換(I) GEOSECSデータ(磁気テープ)の処理について(名大水圏研)○池上 尚・金森 悟
- 1 C04 大気一海洋間における二酸化炭素の交換(II)(名大水圏研)○池上 尚・金森 悟
- 1 C05 ペーリング海における炭酸の分布(名大水圏研)菊谷 彰・池上 尚○金森 悟
(10:45~12:00) 座長 増沢敏行
- 1 C06 沿岸域海底土において還元環境になると溶解しうるリンの鉛直分布(北大水産)○角皆静男・塚田祥文・渡辺康憲
- 1 C07 海水中の希土類元素の定量-II-(東大理・東理大理)○川上 紀・藤本義典・増田彰正
- 1 C08 PIXE法による海水中の懸濁物質の分析(神戸商船大)○大久保隆・三宅 寛・山田昌孝・道嶋正美
- 1 C09 海洋における重金属元素の分布とその機構(名大水圏研・広大総合科学・室蘭工大)○金森 悟・坪田博行・室住正世
- 1 C10 海洋中の²²⁷Acと²³¹Paの挙動について(東大海洋研・金沢大理)○野崎義行・中西 孝
(13:00~14:00) 座長 大槻 晃
- 1 C11 貧酸素水塊形成に対する有機物の役割について(名大水圏研)○松枝秀和・半田暢彦・松永捷司
- 1 C12 海水の溶存態少糖類の化学的性質(名大水圏研)○佐久川弘・半田暢彦
- 1 C13 天然水中における溶存酸素活性の存在とその意義一東京湾におけるアルカリ性ホスファターゼの分布一(東大理)○藤原祺多夫・

- 橋本伸哉・不破敬一郎
- 1 C14 多摩川・東京湾・相模湾におけるペプチターゼ活性の分布とキャラクタリゼーション(東大理)○橋本伸哉・森川敏樹・藤原祺多夫・不破敬一郎
(14:00~15:00) 座長 太田啓一
- 1 C15 海水中のアルキル水銀の存在の有無について(気象研)○鈴木 款・杉村行勇
- 1 C16 海水中の溶存高分子有機窒素化合物の分析について(気象研)○鈴木 款・杉村行勇
- 1 C17 北太平洋西部海水中の溶存有機高分子化合物のアミノ酸残基組成について(気象研)○杉村行勇・鈴木 款
- 1 C18 深海底堆積物における生物攪拌速度について(北大水産)○山田正俊・角皆静男
(15:15~16:15) 座長 野崎義行
- 1 C19 西南日本海堆積物における続成過程(名大水圏研)増沢敏行
- 1 C20 琵琶湖ボーリング・コアサンプルのGeochemical basin analysisの試み(東大理)○豊田和弘・岩田泰夫・間庭直美・原口絃丞・不破敬一郎
- 1 C21 DSDP Leg87で採取された南海トラフー日本海溝の堆積物の化学組成(東大理)○葉袋佳孝・松本 良・富永 健
- 1 C22 Blake一Bahamaの海盆から得られた後期白亜紀の堆積物の古環境について(東洋大自然科学・東大海洋研)○青木三郎・石塚明男・加賀美英雄
(16:15~17:00) 座長 寺田喜久雄
- 1 C23 北西太平洋深海堆積物中のU/Th系列核種(東大海洋研)○梁漢燮・野崎義行
- 1 C24 ジャッキー海嶺よりドレッジされた岩石の化学組成(東大理・東大海洋研)○葉袋佳孝・久保謙哉・富永 健・石井輝秋
- 1 C25 本邦における石炭中の微量成分(地調)○今井 登・安藤 厚・竹田栄蔵

D会場

- 一般講演 (9:30~10:30) 座長 中谷 周
- 1 D01 南極スカレビックハルゼンのスカルの酸素同位体的研究(秋田大鉱山・北大理)○鈴木哲夫・松葉谷治・松枝大治・本吉洋一
- 1 D02 中止
- 1 D03 南極ヤマト複合ユークライトいん石の化学組成(学習院大理)○福岡孝昭・池田和隆
- 1 D04 南極ライト谷における塩類および重金属元素

- の分布(名大水圏研)○富山千里・北野 康
(10:30~11:45) 座長 福岡孝昭
- 1 D05 南極塩湖におけるセジメントトラップ実験(北大水産・弘前大理・学習院大・日本分析セ)○増田宣泰・中谷 周・鳥居信也・鳥居鉄也
- 1 D06 南極ドライバレー地域におけるエアロゾルの化学成分(弘前大理・北大水産・学習院大・千葉工大)○中谷 周・増田宣泰・鳥居信也・鳥居鉄也
- 1 D07 南極ドライバレー地域の湖水の²³⁴U/²³⁸U比(金沢大理・日本分析セ)○小村和久・林巧・鳥居鉄也
- 1 D08 南極ドライバレー地域の湖沼堆積物中のヒドロキシ酸の存在状態と起源(都立大理・東理大理・千葉工大)○松本源喜・半谷高久・長島秀行・鳥居鉄也
- 1 D09 南極ドンファン池の水文学的一考察(弘前大理・千葉工大・国立公衆衛生院)○中谷 周・鳥居鉄也・山県 登
(13:00~14:00) 座長 日下部実
- 1 D10 同位体比よりみたホット・スポット地域の特徴(東大理)兼岡一郎
- 1 D11 深海底堆積物中の希ガスについて(東大理)○高柳昌弘・小嶋 稔
- 1 D12 海底堆積物間隙水中の³He/⁴He比(東大理)○佐野有司・脇田 宏
- 1 D13 セント・ヘレンズ火山のマグマの¹⁸O/¹⁶O,⁸⁷Sr/⁸⁶Sr比と混合モデル(地調・Rice大)○松久幸敬・倉沢 一・W. P. Leeman
(14:00~15:00) 座長 脇田 宏
- 1 D14 地球内部物質の希ガス同位体比(東大理)○小嶋 稔・座主繁男
- 1 D15 ⁴⁰Ar-³⁹Ar法による鉱床生成年代の推定(東大理)○兼岡一郎・鳥崎英彦・李 成成
- 1 D16 同位体比からみたエル・テニエンテおよびアンディーナ斑岩銅鉱床(チリ)の初生鉱化作用と鉱化流体の起源(富山大理・地調・CODE-LCO一Chile)○堀 美香・日下部実・中川聖子・松久幸敬・OJEDA, J. M
- 1 D17 無人岩における斑晶一マグマ間の元素分配(筑波大地球科学)○夙本尚義・末野重穂
(15:15~16:15) 座長 酒井 均
- 1 D18 キンバーライト中の希土類元素(放医研)村松康行
- 1 D19 ケイ酸塩溶融体一気相間のCl⁻の分配(東工大理・東大理)○篠原宏志・飯山敏道・松尾慎士

- 1 D20 化学的にみた伊豆半島の地熱構造 (地調)
○野田徹郎・阿部喜久男
- 1 D21 津軽湯の沢地熱地帯の変質鉱物の酸素同位体比 (秋田大鉱山) ○北 逸郎・松葉谷治・本多朔郎
(16:15~17:15) 座長 田中 剛
- 1 D22 赤城火山噴出物の Sr-O 同位体比にもとづく北関東の火山の成因 (筑波大化・秋田大鉱山・東大震研) 野津憲治・北 逸郎・山口尚志
- 1 D23 流通系における同位体比の分布 (東大海洋研) 川幡穂高
- 1 D24 豊肥地域の熱水系中の溶存硫酸の同位体地球化学 (岡山大温研) ○千葉 仁・酒井 均
- 1 D25 中止

第2日 10月18日 (火)

A会場

課題講演 I [社会地球化学 その2]

- (9:00~10:20) 座長 半谷高久
- 2 A01 (総合講演) 大気中の二酸化炭素問題 (名大水圏研) 北野 康
- 2 A02 (総合講演) 有機塩素化合物の地球化学 (愛媛大農) 立川 涼
- 2 A03 東支那海・黄海の有機塩素化合物 (愛媛大農) ○田辺信介・B. R. Subramanian・立川 涼
(10:30~11:30) 座長 平尾良光
- 2 A04 自動車からのパラジウム、白金の排出 (小山工業高等専門学校) 芦澤 峻
- 2 A05 浦和における降水化学成分と大気粒子状物質について (埼玉大工) ○仲本正彦・君島克憲・小沢竹二郎・斎藤 均
- 2 A06 東京都におけるエアロゾル中の金属成分の供給源 (都立大理) ○信楽義夫・半谷高久
(11:30~12:00) 座長 半谷高久
- 2 A07 物質循環の特徴をあらわす指標についての試案 (三菱化成生命研) ○水谷 広・和田英太郎
(総合討論)

一般講演 (13:00~13:45) 座長 椎川 誠

- 2 A08 PIXE 法によるヒト腎臓中の微量元素分析 (放射線医学総合研・都立大理) ○湯川雅枝・喜多尾憲助・寺井 稔

- 2 A09 生体内微量元素の分布について (第2報) (カエルの臓器を中心として) (都立大理・都大研) ○寺井 稔・谷崎良之
- 2 A10 降水中の粒子の元素組成 (国立公害研) ○安部喜也・西川雅高
(13:45~14:30) 座長 武藤 覚
- 2 A11 沖縄における自然物の動き (琉球大理) 渡久山章
- 2 A12 環境中の放射性ヨウ素の化学形と植物への移行について (放医研) ○村松康行・大桃洋一郎
- 2 A13 含ヒ素硫化鉄鉱の酸化分解機構の検討 (続報) (岩手大工) ○浅部喜幸・後藤達夫・梅津芳生
- 総 会 (15:00~16:00)

特別講演 (16:00~17:30)

東京湾の生い立ちと人工改変 (都立大理) 貝塚英平

B会場

課題講演 II [有機地球化学 その1]

- コンビーナー 田口一雄・石渡良志
(9:00~10:40) 座長 石渡良志
- 2 B01 堆積過程の初期における有機物の続成的変化 (名大水圏研) ○半田暢彦・松枝秀和・松永捷司
- 2 B02 東部太平洋における有機物の鉛直輸送機構について (名大水圏研) ○松枝秀和・半田暢彦・浜 健夫
- 2 B03 湖底堆積物中における各種炭化水素のメタン化 (愛知学院大教養) 小山忠四郎
- 2 B04 内湾表層堆積物における有機物の分解 (名大水圏研) ○松永捷司・佐藤茂之・松枝秀和・半田暢彦
(10:40~12:00) 座長 下山 晃
- 2 B05 湖水リピッド成分の酸化的条件における変化 (都立大理) 小椋和子
- 2 B06 播磨灘堆積物中の核酸塩基の定量とその動態 (香川大農) ○門谷 茂・岡市友利
- 2 B07 霞ヶ浦堆積物中のプリン、ピリミジン (地調) ○寺島美南子・井内美郎
- 2 B08 堆積高分子有機物の生成過程 III, アミノ酸組成からみた Maillard 反応の寄与 (都立大理) ○山本修一・石渡良志
- 課題講演 II [有機地球化学 その2]
(13:00~14:40) 座長 鈴木徳行

- 2 B09 海洋表層堆積物における不溶性脂質の存在分布 I, 脂肪酸 (愛知学院大教養・フロリダアトランティック大) ○西村弥重・E. W. Baker
- 2 B10 びわ湖700mコアにおける炭水化物の深度分布 (都立大理) ○鶴崎 実・石渡良志・小椋和子
- 2 B11 海洋フミン物質の分子量とけい光スペクトルによるキャラクタリゼーション (広島大総合科学) ○早瀬光司・坪田博行
- 2 B12 地下水中に溶存する腐植物質の分解実験 (国立公害研) ○白石寛明・大槻 晃
- 2 B13 大気粉じん中の腐植様物質のキャラクタリゼーションとその起源の推定 (国立公害研) ○向井人史・安部喜也

C会場

一般講演 (9:00~9:45) 座長 角皆静男

- 2 C01 合成酸化物を用いたマンガン団塊の重金属濃集機構の研究 (地調) 臼井 朗
- 2 C02 バナジウム、クロムおよびモリブデンのマンガン酸化物—海水間の分配 (理研・京大理・東海大海洋) ○竹松 伸・中山英一郎・佐藤義夫・岡部史郎
- 2 C03 中央太平洋海盆より採取されたマンガンノジュールの¹³⁸Ce/¹⁴²Ce, ¹⁴³Nd/¹⁴⁴Nd (地調・東大理) ○田中 剛・臼井 朗・増田彰正

- (9:45~10:30) 座長 兼岡一郎
- 2 C04 タンデム型加速器による¹⁴C直接測定と年代測定への応用 (名大理・名大アイソトープセ) ○中井信之・中村俊夫・山下博史
- 2 C05 ²⁴⁴Pu 年代測定法の可能性について (群馬大教養) 海老原充
- 2 C06 天然水の D/H 測定における新しい前処理法—水、水素同位体交換による試料水素ガスの調製— (東工大理) ○藤野博史・大隅多加志・松尾禎士
(10:45~12:00) 座長 中井信之
- 2 C07 黄鉄鉱の熱分解における硫黄同位体の分別 (岡山大理) 山本雅弘
- 2 C08 土壌中の石英の酸素同位体比とその起源 (地調・九大農) ○松久幸敬・溝田智俊
- 2 C09 世界のいくつかの代表的玄武岩中の Ce と Nd の同位体比 (東大理・地調) ○増田彰正・田中 剛・河田陽介・清水 洋
- 2 C10 地質調査所発行の10種の標準岩石試料とその化学組成 (地調) ○安藤 厚・大森貞子・寺

島 滋

- 2 C11 標準岩石試料の放射化分析 (金沢大理) ○青田尚美・日光豊錦・岡田喜久雄・坂本 浩
(13:00~14:00) 座長 増田彰正
- 2 C12 酸性硫黄泉に浸せきした安山岩のリーゼンング環の人工作成 (横浜国大教育) ○武藤 覚・村山治太
- 2 C13 EPMA によるガラス包有物中の微量イオウの定量 (岡山大温研) ○上田 晃・酒井 均
- 2 C14 かんらん石結晶中における陽イオンの拡散 (東大 RI セ・学習院大理) ○森岡正名・高桑 優・滋野真弓・伊藤理恵子・長沢 宏
- 2 C15 スンダ海峡内の火山岩について (京大理・京大教養・インドネシア科学局) ○西村 進・池田 隆・F. Hehuwat
(14:00~15:00) 座長 安藤 厚
- 2 C16 チャートの成因に関する研究(1)熱水起源のチャート (名大理) ○杉崎隆一・山本鋼志・足立 守
- 2 C17 チャートの成因に関する研究(2)酸性凝灰岩起源のチャート (名大理) ○山本鋼志・杉崎隆一・足立 守
- 2 C18 チャートの成因に関する研究(3)石灰岩と互層をなすチャート (名大理) ○大橋優喜・杉崎隆一・足立 守
- 2 C19 第三紀火山岩の微量元素分析 (群馬大教養・東大理) ○海老原充・中村裕二・脇田 宏

D会場

一般講演 (9:00~10:30) 座長 鹿園直建

- 2 D01 ガラパゴス海嶺における海底下の熱水変質 1—熱水変質の場について— (東大海洋研) ○川幡穂高・古田俊夫
- 2 D02 ガラパゴス海嶺における海底下の熱水変質 2—化学的環境について— (東大海洋研) 川幡穂高
- 2 D03 天然の熱水中の水素 (H₂) の意味するもの (岡山大温研) 木島宣明
- 2 D04 熱水条件下における玄武岩の酸化還元特性 (岡山大温研) ○木島宣明・酒井 均
- 2 D05 ケイ酸溶液中でのアルミニウムの挙動 (九大理) ○横山拓史・木村晴美・樽谷俊和
- 2 D06 酸性泉に共存する一次固相の経時変化と溶液相の関連について (箱根大涌谷) (東海大理) ○藪田 誠・香山 勲
(10:45~12:00) 座長 水谷義彦
- 2 D07 ケイ酸ガラスと (Na, K) Cl 溶液間の熱水反

- 応(I) (東大理) 白木亮司
- 2 D08 ケイ酸ガラスと (Na, K) Cl 溶液間の熱水反応 (II) (東大理) 白木亮司
- 2 D09 現在および過去の熱水系のガス分圧の推定と支配要因 I — P_{CO_2} — について (東大理) 鹿園直建
- 2 D10 現在および過去の熱水系のガス分圧の推定と支配要因 II — PS_2 — について (東大理) 鹿園直建
- 2 D11 小笠原諸島無人岩中の水の水素同位体比 (富山大理・愛知教育大・山口大理・静岡大理) ○佐竹 洋・田中 守・平井昭子・浦野隼臣・白木敬一・黒田 直
(13:00~14:00) 座長 小嶋 稔
- 2 D12 黒部高熱トンネル中の噴気および熱水の同位体組成 (富山大理) ○水谷義彦・日下部実・佐竹 洋
- 2 D13 アイスランドの地熱ガスの同位体比および化学組成 (東大理・岡山大理) ○佐野有司・脇田 宏・ト部明子・千葉 仁
- 2 D14 希ガス同位体からみた噴気ガスへの地下水の混入 (山形大理) 高岡宣雄
- 2 D15 鹿児島県川薩地方の温泉ガスに関する研究 — ヘリウムを中心として (地調) ○坂田 将・永田松三・福田 理
(14:00~14:45) 座長 佐藤和郎
- 2 D16 東北日本における火山の噴気孔ガスの N_2/Ar , He/Ar 比について (名大理) 清棲保弘
- 2 D17 焼岳および御岳山ガスの組成変化について (愛知教育大・富山大理) ○杉浦 孜・水谷義彦
- 2 D18 地熱地帯の噴気活動にともなって放出される水銀含量 (千葉大理) 中川良三

第3日 10月19日 (水)

A会場

- 一般講演 (9:00~10:30) 座長 平木敬三
- 3 A01 荒川上流域の水質 (その3) 河川水量の増減による水質変動 (埼玉大工) ○清水 要・小沢竹二郎・君島克憲
- 3 A02 富士五湖の水質 (神奈川温泉地学研) 鈴木孝雄
- 3 A03 滋賀県高時川の水質 — 流域規模と林令との関連 (京大防災研・阪市大理) ○吉岡龍馬・小川房人・升方ひろみ
- 3 A04 山口県秋吉台のカルスト地下水系とその銅含量 (九大理) ○吉村和久・樽谷俊和

- 3 A05 貯水池における溶存成分の深度分布 (甲南大理) ○日下 譲・辻 治雄・玉利祐三・西村公男
- 3 A06 仙台市における地下水の水質 (第1報) — pH について — (仙台市衛試) ○金子恵美子・大金由夫・広島紀以子・井上康子・三島靖子・菅野 直・関 敏彦
(10:45~12:00) 座長 吉岡龍馬
- 3 A07 河川水の溶存酸素と pH の関係 (佐賀短大・佐賀大理工) ○飯盛喜代春・岡本泰明・飯盛和代
- 3 A08 霞ヶ浦高浜入における溶存有機態リン濃度の季節変動とその化学的性質 (国立公害研) ○大槻 晃・河合崇欣・相崎守弘
- 3 A09 阿寒湖における栄養塩の月別変化について (北海道公害研) ○坂田康一・青井孝夫・村田清康・日野修次・近藤秀治
- 3 A10 琵琶湖およびその周辺河川中の生物中の微量必須元素の濃度について (近畿大) ○中口譲・平木敬三・森田道隆・吉田武志・西川泰治
- 3 A11 河川水中の鉄の存在状態 (九大 R I・九大理) ○大崎 進・黒木康弘・高島良正
(13:00~14:00) 座長 後藤達夫
- 3 A12 河川水中の微量元素の存在状態 (都ア研) ○谷崎良之・山崎正夫・永塚澄子
- 3 A13 ミクロキスティスによる溶存微量重金属元素の形態変化 (足利工大) ○荻原俊夫・小平潔
- 3 A14 河川浮遊物への微量元素の濃縮機構について (岡山大農業生物研) ○寺岡久之・中島 進・八木正一
- 3 A15 高梁川によって河口へ運搬される浮遊物量と元素量について (岡山大農業生物研) 寺岡久之
(14:00~15:00) 座長 松本英二
- 3 A16 多元系水酸化物担体による微量必須元素の共沈殿について (近畿大) ○室中康利・平木敬三・西川泰治・重松恒信
- 3 A17 水 — 堆積物間における金属元素の溶脱と固定について (近畿大理工) ○山崎秀夫・合田四郎
- 3 A18 淡水池堆積物からの栄養塩および重金属元素の溶出 (電力中研) 坂田昌弘
- 3 A19 多摩川河口域における微量重金属の挙動 (東大理) ○赤木 右・原口紘丞・不破敏一郎
(15:15~16:00) 座長 坂田昌弘

- 3 A20 潮間帯から発生する硫化水素の硫黄同位体比 (名大理) ○辻 康・中井信之
- 3 A21 同位体比等よりみた三河湾堆積物中の硫黄の挙動 (名大理) ○高橋正明・中井信之
- 3 A22 底泥中のアルミニウムの溶解挙動 (国立公害研) ○河合崇欣・西川雅高・野尻幸宏・大槻 晃
(16:00~17:00) 座長 入江敏勝
- 3 A23 三方五湖堆積物および周辺の岩石土壌中の元素分布 (金沢大理) ○寺田喜久雄・林 徳幸
- 3 A24 渡良瀬川底質中の重金属について (群馬衛公研) ○内山征洋・中島 右・氏家淳雄
- 3 A25 阿寒湖における新生堆積物中の重金属について (北海道公害研) 坂田康一
- 3 A26 河川堆積物の分析データの因子分析 (地調) 伊藤司郎

B会場

課題講演 II [有機地球化学 その3]

- (9:00~10:40) 座長 半田暢彦
- 3 B01 堆積高分子有機物の酸分解 II 生成物からみたタイプ分けの試み (都立大理) ○森永茂生・山本修一・石渡良志
- 3 B02 現世堆積物ケロジェンの分離法の検討 (都立大理) ○中崎宣晃・石渡良志・福島和夫
- 3 B03 生物および有機物の $\delta^{15}N$ と $\delta^{13}C$ の関係 (三菱化成生命研) ○和田英太郎・蒲谷裕子
- 3 B04 東京湾における懸濁物質の炭素安定同位体比 (東農工大農・三菱化成生命研) ○木村健司・小倉紀雄・南川雅男
- 3 B05 第四紀貝化石の年代とアミノ酸の D/L 比 (筑波大化) ○斎藤直美・下山 晃・増田富士雄・原田 馨
(10:40~12:00) 座長 秋山雅彦
- 3 B06 堆積岩有機物の続成変化 — 山形県新庄盆地新第三系における研究例 — (東北大理・総研 A「堆積岩の続成作用に関する研究」班) 田口一雄
- 3 B07 新庄新第三系堆積岩における n -アルカンの生成過程 (都立大理) ○塩谷 真・石渡良志
- 3 B08 ステラン・ホパンの異性化にもとづく堆積岩の最大古地温の推定法について (島根大理) 鈴木徳行

課題講演 II [有機地球化学 その4]

- (13:00~14:40) 座長 田口一雄
- 3 B09 1H -NMRT₁による有機熟成度の評価 (北大理・弘前大教養) ○秋山雅彦・氏家良博

- 3 B10 先カンブリア時代の岩石の黒雲母に含まれるアンモニウム — 化学化石として — (阪市大理) 市原優子
- 3 B11 堆積岩ケロジェンの熱変化 I, 化学的酸化分解法による知見 (都立大理・オレゴン州大) ○石渡良志・森永茂生・B. Simoneit
- 3 B12 熱変質過程における堆積岩中の炭素物質の変化 (名大理) ○富田俊弘・中井信之
- 3 B13 炭化水素の生成, 移動, 集積解明の有機地球化学的アプローチ (新潟平野地域におけるケース・スタディ) (石油公団・帝国石油・石油資源) ○佐藤俊二・重川 守・関口嘉一・武田信従

C会場

- 一般講演 (9:00~9:45) 座長 金森暢子
- 3 C01 固体高分解能 ^{29}Si — NMR および ESR による粘土鉱物の研究 (東大理・国立がん研) ○渡部徳子・清水 洋・増田彰正・斎藤 肇
- 3 C02 与論島炭酸塩岩のフッ素含量 (群馬大工) ○相沢省一・赤岩英夫
- 3 C03 放射化分析による琉球諸島産石灰岩ならびに関連物質の微量成分 (琉球大理・京大原子炉) ○兼島 清・小山陸夫・平良初男・大森 保・高田実弥
(9:45~11:00) 座長 兼島 清
- 3 C04 溶液組成規制法を用いた炭酸カルシウムの結晶成長の研究 (新潟大理・ニューヨーク州大) ○澤田 清・G. H. Nancollas
- 3 C05 炭酸カルシウムの結晶生成機構 (新潟大理) ○荻野 健・鈴木俊雄・澤田 清
- 3 C06 aragonite から calcite への転移に関する因子について (愛知教育大地球学・名大水圏研) ○吉岡小夜子・北野 康・金森暢子
- 3 C07 生物性炭酸塩の生成機構 (名大水圏研) ○金森暢子・金森 悟
- 3 C08 THE EVOLUTION OF THE Ca-CHLORIDIC DEAD SEA BRINE (ヘブライ大) Israel ZAK

D会場

- 一般講演 (9:00~10:30) 座長 小坂文予
- 3 D01 日本のヘリウムを含む天然ガス (地調) ○福田 理・永田松三・坂田 将
- 3 D02 温泉ガス・天然ガスの炭素および窒素同位体比 (東大理) ○ト部明子・富永 健・中村裕二・脇田 宏

- 3 D03 福岡市郊外二日市温泉地区の浅層土壌ガス (九大生産科学研) ○古賀昭人・野中美次郎
- 3 D04 御岳火山周辺の温泉水, 地表水中の硫黄, 炭素化合物の由来 (玉野総合コンサルタント・名大理) ○出口寿昭・中井信之
- 3 D05 Cl-SO₄型酸性泉の水の同位体組成 (名大理) ○清棲保弘・倉橋 誠
- 3 D06 日本の温泉水の⁸⁷Sr/⁸⁶Sr 比 (筑波大化・東大理) ○野津憲治・脇田 宏・中村裕二 (10:45~12:00) 座長 古賀昭人
- 3 D07 イオンクロマトグラフを用いた温泉水中の無機イオンの分析について (岡山大温研・阪市大理) ○柳沢文孝・酒井 均・益田晴恵
- 3 D08 食塩泉から析出した炭酸塩中のリチウム (東邦大) ○今橋正征・高松信樹・下平京子
- 3 D09 草津白根火山1982年の噴火の状況と火山ガス成分の変化 (東工大工・埼玉大工・上智大理工) ○平林順一・小坂丈予・小沢竹二郎・小坂知子
- 3 D10 草津白根火山1982年の噴火に伴う水質変化 (東工大工・上智大理工) ○小坂丈予・平林順一・小坂知子
- 3 D11 濃度相関マトリックス法による山形県の温泉の研究 (II) 山形市周辺の温泉 (山形大理) 入江敏勝 (13:00~14:00) 座長 今橋正征
- 3 D12 近畿地方に分布する食塩泉の地球化学的研究 (阪市大理・岡山大温研) ○益田晴恵・鶴巻道二・酒井 均
- 3 D13 鹿児島県阿多カルデラ内の地下水, 温泉水の地球化学的研究 (岡山大温研・阪市大理) ○賈 疏源・千葉 仁・柳沢文孝・酒井 均・益田晴恵
- 3 D14 登別温泉の化学成分の経年変化 (室蘭工大) 安孫子勤
- 3 D15 草津北東方の温泉 (中央温泉研) 佐藤幸二 (14:00~15:15) 座長 野津憲治
- 3 D16 メタン系天然ガスの起源 (東大理) ○脇田 宏・佐野有司・ト部明子
- 3 D17 活断層から放出される水素について (名大理・富山大理) ○杉崎隆一・井戸正彦・武田 浩・磯部由美子・林 義光・中村則明・佐竹 洋・水谷義彦
- 3 D18 跡津川断層, 牛首断層における水素放出の同時性 (富山大理) ○佐竹 洋・大橋雅彦・水谷義彦
- 3 D19 断層から放出される水素の起源 (国立防災セ・東工大理・学習院大理) ○吉田則夫・垣内正久
- 3 D20 松山における地震化学観測, 被圧地下水とものうガスの定期測定 (愛媛大理) ○川辺岩夫・水谷敏彦
- 講演要旨集 3,500円 (送付のみ可)
- 申込先 〒158 東京都世田谷区深沢2-1-1 東京都立大学・理学部・分析化学研究室内 1983年度日本地球化学会年会準備委員会 委員長 半谷高久 電話03 (717) 0111
- 1983年度第1回日本地球化学会 評議員会議事録
- 日 時: 1983年2月12日(出) 17時15分~19時45分
場 所: 赤門学士会館
出席者: 北野 康会長 松尾禎士副会長 一国雅巳, 小椋和子, 小倉紀雄, 兼島 清 桑本 融, 杉村行勇, 椎川 誠, 田中 剛 角皆静男, 野津憲治, 半田暢彦, 馬淵久夫 各評議員, 鳥居鉄也監事
- I. 前回の議事録を承認した。
- II. 報告
- 田中重男評議員の逝去について (半田評議員) 田中重男評議員は1982年10月19日逝去された。告別式には評議員会一同の名前で献花をした。
 - 庶務委員会 (半田評議員) ○1983年度から日本学会事務センターへ雑誌などの保管料を支払うことにした。○国際年代学会組織委員会からの委託金の取扱いについては次回の幹事会 (4月開催予定) で検討したあと、その結果を評議員会にはかることにした。○雑誌の別刷代の値上げ巾については次回の幹事会で検討することにした。
 - 会計委員会 (小椋評議員) ○雑誌の発行がおくれているので、1982年度の会計を次回の評議員会で報告したい。○会費の未払い者は、現在23名に達している。
 - 行事委員会 (野津評議員) ○2月例会を2月12日(出)に行った。自然界における拡散現象
 - 深海底堆積物 大隅多加志 (東工大・理)
 - 造岩鉱物 森岡正名 (東大アイソトープ総合センター)

- 出席者は35名であった。
5. ニュース発行委員会 (田中評議員) ○No97 2月はじめに発行した。○No98 原稿〆切は4月下旬, 発行は5月。
6. 編集委員会 (一国評議員) ○G. J.: Vol. 16 No. 5は2月中旬に発行予定。Vol. 16 No. 6は3月初旬に発行予定。Vol. 17 No. 1・2は原稿がそろっている。Vol. 17 No. 3は原稿2編をもっている。○地球化学: Vol. 16 No. 2は再稿終了。Vol. 17 No. 1は東京湾関係の論文の特集号とする。
7. その他
- 水—岩石相互作用国際研究集会についての酒井均評議員からの伝言 (松尾副会長) 2nd Circular の配布を昨年10月に実施した。
 - 本田雅健会員からの伝言 (松尾副会長) 学術会議の地球化学宇宙化学研究連絡会が来る2月21日に開催予定である。取り上げる議題があったら本田会員に申し出てほしい。
 - 汎太平洋化学会議について (小椋評議員) 同会議のシンポジウムテーマのうち、地球化学関係のテーマについて積極的に応募してほしいと、この窓口になっている石渡良志会員からの依頼事項の紹介があった。
- III. 議事
- 国際年代学会委員会からの委託金の取扱いについて 委託金の取扱いについて、一、二の評議員から具体的な案が示されたが、次回の幹事会 (4月開催予定) において検討することとした。
 - 本年度議すべき重要項目の整理
 - 学術会議に対応した本学会の窓口として松尾副会長があたることとした。
 - IGCに対応した本学会の窓口として松尾副会長があたることとした。
 - 選挙について (北野会長) 1984-5年度の本学会の役員選挙のため、選挙管理委員会を設立してほしいと提案があった。意見交換の結果、馬淵、一国および杉村各評議員を選出した。また、互選により馬淵久夫評議員を委員長に選出した。
 - 年会について (小椋評議員) 1983年度年会は都立大 (大会委員長は半谷高久会員) でお世話願うこととし、課題討論は以下

- の2つとした。
- 課題討論
- 社会地球化学 (コンビーナー: 安部喜也, 半谷高久)
- 有機地球化学 (コンビーナー: 田口一雄, 石渡良志)
- また、課題討論のテーマは現在もお募集中であり、その〆切は2月末日である。
- 会員の除籍について 会費滞納者は現在23名である。これらの会員に対する退会手続きの決定案を次回の幹事会で作ることとした。
- 財政委員会 本学会の財政問題については継続審議中である。
- 1982年度年会の決算報告を承認した。

IV. その他

- 特定研究設立の検討について (北野 康会長) 地球化学関係のテーマで科研費枠内に特定研究を設定することが可能かどうかを、具体的に検討する計画があるとの発言があった。
- 名誉会員の推薦について (北野 康会長) 本学会の名誉会員は現在2名となっていたので、名誉会員の推薦があったら評議員会に申し出て欲しい、と発言があった。
- ニュースの編集について 本学会会員・名誉会員の逝去の場合、雑誌「地球化学」にその名前を掲載する。
- 飯盛里安名誉会員の御逝去に伴い、退会手続きをとることとした。

V. 入退会

入会申込書受理リスト (1983・6・8現在)				
コード	氏 名	所 属	備考	
1234	薬袋佳孝	東京大学理学部		
1236	岡崎和彦	(株)ダイヤコンサルタント		
1238	藤川格司	日本大学文理学部		
1239	内山征洋	群馬県衛生公害研究所		
1235	岡村 聡	北海道大学理学部	学生会員	
1240	今村峯雄	東京大学原子核研究所		
1230	坂田 将	工業技術院地質調査所		
1237	菅 和哉	道立地下資源調査所		
1241	原田武夫	北海道大学水産学部		
1243	真鍋武彦	兵庫県立水産試験所		

退会届受理リスト (1983・6・8現在)			
コード	氏名	所 属	
	萩野 堅		
	小林 純	岡山大学農業生物研究所	
	大森貞子	工業技術院地質調査所	
	陸 厚	三省堂	
	渋谷靖弘	東京大学理学部	
	古田正次	愛知県公害調査センター	

会員現況 (1983・6・8現在)				
	正会員	賛助会員	名誉会員	計
1982年12月	858	12	3	873
1983年6月	862	12	3	877
(増)	4	0	0	4
	(以上)			

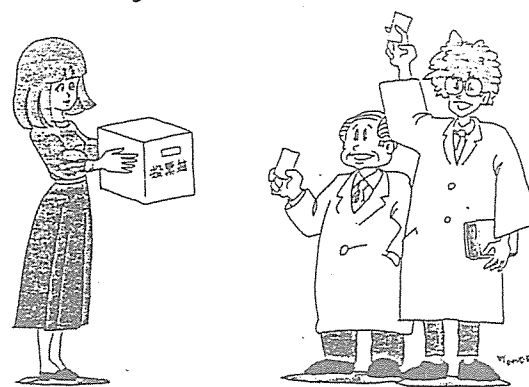
学術会議地球化学・宇宙化学研究連絡会付置 隕石学・宇宙化学小委員会報告

標記小委員会の会合が、昭和58年7月5日宇宙科学研究所において持たれました。出席者は本田雅健、増田彰正、武田弘、小嶋稔、清水幹夫、長谷川博一、松井孝典、矢内桂三、田中剛の9名で、本田委員長から経過報告がなされ、今後の活動方針が討議されました。

まず、会の存在をより強固なものとするため、会員(隕石研究者)の把握に努め、研究者名簿を作成することが提案されました。これは現在、作成作業中です。

次に活動の重点として、国内における隕石研究者の便を図るため、非南極隕石をまとめて保管し、必要な配布を行うことの是非が論じられた。これは現在、いくつかの研究所において埋もれつつある隕石を発掘集中管理するとともに、研究上必要な隕石の共同購入、外国の研究機関との隕石試料の交換等を行い、国内における研究試料の共同確保をめざすものです。これは保管場所等の問題もあり、結論は出ておりません。
(田中 剛)

大切な選挙です!
忘れずに
投票しましょう



日本地球化学会1984・1985年度役員選挙
投票締切 9月30日

“ニュース100号記念”記事や御意見をお寄せ下さい
本ニュースは年3回(大体5月、9月、1月)発行されます。記事は横書き1行24字(用紙は自由)にて書いていただければ助かります。次回100号は1月10日/切1月下旬発行の予定です。—ニュース編集係—

編集者 田中 剛, 清水 洋
〒350 茨城県筑波郡谷田部町東1-1-3
地質調査所 企画室
電話 0298(54)3572

発行所 日本地球化学会
〒113 東京都文京区弥生2-4-16
学会センタービル(4F)
日本学会事務センター内
電話 東京03(815)1903
振込先銀行 三井銀行上野広小路支店
普通預金 口座番号 920-833

日本地球化学会ニュース

No. 100

1984. II. 7

会長に就任するに当って

松尾禎士(東京工業大学 理学部)

本会に対して重大な責任を負っている会長という立場になって改めて感じることは、本会は日本の地球化学のための利益代表として十分に機能しているであろうかという疑問である。1953年に本会の前身である地球化学研究会が約200名の会員のもとで発足したとき、会員は日本における地球化学の研究者が一つの組織を持ちうるに至ったことを純粋に喜びをもって迎えたことであろう。当時は利益代表としての期待はほとんどなかったものと思う。

その後約30年たった。会員数は800名を超え、一年6冊の国際的評価をえている Geochemical Journal、2冊の「地球化学」が会員にわたるようになった。日本学術会議の地球化学・宇宙化学研究連絡会を構成する主要学会として、本会の国際的・国内的基礎もかたまってきた。地球化学の分野の国際学会も日本で数多くひらかれた。諸先輩の御努力によって、われわれ会員は十分に利益をえているといえる。日本における地球化学の歴史の浅さを考えると、よくここまで来たという感じさえする。*

一方、学会としての基礎がかたまってきた現在、喜んでばかりいられない事情も少なからず存在する。最近20年間、地球科学の分野では各種の国際計画が行なわれ、また行なわれようとしているが、地球化学は概して乗り遅れた。日本主導の国際的地球化学計画もない。地球化学の分野に組織的に巨額の研究費が流れこんだこともない。戦後日本の大学で新設された地球化学の講座数は、例えば生物物理学のそれにくらべると1/5以下である。従って若い研究者の育成の場所が限られている。日本では地球物理学は大勢の人が知っているが、地球化学を知っている人は少ない。これらのことをあげつらうのは、日本の地球化学の歴史の浅さを考慮しない行為かもしれない。しかし、上にのべた事実と感想は会員諸兄姉に訴えたいことである。

*地球化学という言葉は、日本では柴田雄次先生によって1926年にはじめて使われた。地球化学、9、1(1975) 参照

日本では歴史的事情もあって、地球化学研究者には化学出身の人の割合が高い。地球化学を定義することは困難であるが、地球化学を専攻していると考えられる人々が、その出身が地質学であったり、地球物理学であったりするために主な学会活動の場として本会选择にくいという傾向がある。本会は化学出身者の仲よしクラブであるため排他的雰囲気があるという批判があるが、私自身が化学出身であるため自信をもって否と言えるほど客観的な立場にない。

私は研究者になってから絶えず本会に関心を持たざるを得ない境遇に恵まれたが、他の学会に対しては消極的会員であるにすぎない。どの学会でも消極的会員の割合は決して低くないであろう。本会でも消極的会員の割合を増やすようなことはやってはならないが、敢て危険をかえりみずに一つの意見をのべさせていただくならば、本会が日本の地球化学の利益代表として機能するための方策の一つは、会長への権限の集中である。

日本の医師の利益代表の頂点にいた武見さんの例をみるまでもなく、会長個人の力がいかに組織に影響するかは自明である。独裁をするには会の規模は関係ない。会長が独裁するのにふさわしい個性と識見をもっており、会員はそのためのリスクを甘受できればよい。私の記憶に誤りがなければ、数十年前、米国の海洋学会は当時海洋学に無縁ではあるが、行政能力抜群であるとみなされた H. Brown を会長に選んだ。その結果は、海洋底掘削の大事業、深海潜水艇の活躍などに実を結んでいるといえよう。

近い将来、地球化学には縁が薄くても、日本の地球化学の利益代表になりうるような人を会長に選んで大幅の権限を与えることは、日本の風土になじまないかもしれないが一考に値すると思う。私自身は、語るに落ちるけれども、あらゆる点で力が足りないことを自覚する。ただ私は日本地球化学会がそろそろ日本の地球化学の利益代表という方向へ動きはじめてもよいのではないかという感じだけは強く持っており、また何が利益といえるのかということについてもよく考えたいと思っている。この点について会員諸兄姉の御意見をいただければ幸いと思うのである。